

楕円曲線の Hodge-Arakelov 理論 I

望月 新一

京都大学数理解析研究所

motizuki@kurims.kyoto-u.ac.jp

§1. 主結果

(比較同型と数論的

小平—Spencer 射)

§2. 哲学： 「絶対的な微分を求めて」

§1. 主結果

(A.) 比較同型の簡略版

K : 標数 0 の体

E : K 上の楕円曲線

E^\dagger : その 普遍拡大

= { $(\mathcal{L}, \nabla_{\mathcal{L}})$ のモジュライ :
ただし、 $\deg(\mathcal{L}) = 0$ }

$$\stackrel{\text{char } 0}{=} H_{\text{DR}}^1(E, \mathcal{O}_E^\times)$$

$$\implies E^\dagger \longrightarrow E$$

.... ω_E ($\stackrel{\text{def}}{=} \Omega_{E/K}|_{0_E}$)-torsor

\mathbf{C} 上では: $E^\dagger = H_{\text{DR}}^1(E, \mathcal{O}_E)/\Lambda$

ただし、 $\Lambda = H_{\text{sing}}^1(E, 2\pi i\mathbf{Z}) \cong \mathbf{Z}^2$

一般には:

$$E^\dagger \text{ の接空間} = H_{\text{DR}}^1(E, \mathcal{O}_E)$$

標数 0: ${}_d E^\dagger \cong {}_d E \stackrel{\text{def}}{=} \ker [d] : E \rightarrow E$
($d > 0$: 整数)

(混標数では、分母が発生)

$\eta \in E(K)$: 位数 m の等分点、
s. t. d が m を割らない。

$$\mathcal{L} \stackrel{\text{def}}{=} \mathcal{O}_E(d \cdot [\eta])$$

主定理: 制限射

$$\Gamma(E^\dagger, \mathcal{L})^{<d} \xrightarrow{\sim} \mathcal{L}|_{{}_d E^\dagger}$$

は同型に成る。

注:

- (1.) 「 $< d$ 」とは “torsorial degree”
(E^\dagger/E の相対的度数) $< d$.
- (2.) 両辺とも d^2 次元 K ベクトル空間。
- (3.) d が m を割り切る時、定理は
不成立。例えば、 $d = m = 1$ なら、
 $\Gamma(E, \mathcal{O}_E([0_E]) = \mathcal{L}) \rightarrow \mathcal{L}|_{0_E}$ は 0
になる。
- (4.) 証明:
Mumford の代数的テータ関数
+ Zhang の admiss. metric の理論
+ やや込み入った次数の計算。

(B.) 「数論的」素点における整構造

一般に:

$$0 \rightarrow \omega_E \rightarrow E^\dagger \rightarrow E \rightarrow 0$$

($\omega_E = E$ 上の不変微分)

「無限遠点」 ∞ の近傍では:

$$E = \mathbf{G}_m / q^{\mathbf{Z}}$$

(‘Tate curve’)

$\implies q$ に関する巾級数環上では:

$$\widehat{E} = \widehat{\mathbf{G}}_m$$

$$\widehat{E}^\dagger = \widehat{\mathbf{G}}_m \times \widehat{\omega}_E = \widehat{\mathbf{G}}_m \times \left\langle \frac{dU}{U} \right\rangle$$

有限素点（混標数）における整構造：

$$\mathcal{O}_{\hat{E}}[T] = \bigoplus \mathcal{O}_{\hat{E}} \cdot T^j \implies \bigoplus \mathcal{O}_{\hat{E}} \cdot \binom{T}{j}$$

ただし、 $T: \frac{dU}{U}$ に定まる ω_E 上の座標

.. ∞ だけではなく、 $\overline{\mathcal{M}}_{1,0}$ 全体の上に
 p 進的に延長可。

∞ での整構造：

$$\bigoplus \mathcal{O}_{\hat{E}} \cdot \binom{T}{j} \implies$$

$$\bigoplus \mathcal{O}_{\hat{E}} \cdot q^{\approx -j^2/8d} \cdot \binom{T}{j}$$

“ガウス極” (cf. ガウス分布 e^{-x^2})

重要なテーマ:

ガウス分布とその微分

(cf. Hermite 多項式)

...Dio. 幾何への応用への障害でもある。

無限素点における整構造:

‘DR metric’ と ‘étale metric’ を

関係付けたい \implies 特殊関数 を用いる

— モデル:

Hermite 多項式 (slope = $\frac{1}{2}$)

Legendre 多項式 (slope = 1)

= lim (離散的 Tchebycheff 多項式)

二項係数 多項式 = $\binom{T}{r}$ (slope = 0)

slope = $d \rightarrow \infty$ 時の scaling factor

(cf. cryst. coh. への Frob の作用)

(C.) 数論的な小平 — Spencer 射

主定理は関数論的な比較同型:

線型的な関数 + 等分点たちの完備化

⇒ 古典的な比較同型になる:

C 上では:

$$\begin{array}{ccc} H_{\text{DR}}^1(E, \mathcal{O}_E) & \supseteq & H_{\text{sing}}^1(E, 2\pi i \cdot \mathbf{R}) \\ \downarrow & & \downarrow \\ E^\dagger & \supseteq & E_{\mathbf{R}} \end{array}$$

p 進体上では :

Hodge-Tate, DR 比較同型 :

$$'H_{\text{DR}}^1 \cong H_{\text{ét}}^1'$$

も p 巾 等分点 への制限射で定義可能。

一般には (大域体、 \mathbf{C} 、 p 進体) :

$$\{\text{DR coh.}\} \xrightarrow{\sim} \{\text{ét. coh.}\} \curvearrowright \underline{\text{Galois}}$$

\implies Galois は DR coh. に作用 !!

\implies Hodge フィルへの影響を見ると

\implies 小平 — **Spencer** 射

base における移動

\mapsto 誘導される Hodge フィルの移動

C 上では:

‘Galois’ = $SL_2(\mathbf{R})$ (上半平面に作用)
 \implies 上の ‘数論的 KS’ = 古典的な KS

p 進体上では:

$\text{Gal}(\mathbf{Z}_p[[T]]_{\mathbf{Q}_p})$
 $\approx \text{Tang. bun.}(\mathbf{Z}_p[[T]]_{\mathbf{Q}_p})$
(Faltings の alm. et. extns. の理論)
 \implies 上の ‘数論的 KS’ = 古典的な KS
(cf. Serre-Tate 理論)

Hodge-Arakelov (=大域体) の場合 :

$\text{Gal}(\text{楕円曲線の族の Base} \otimes \mathbf{Q})$

数論的 KS \longrightarrow {Arak. 理論的 flag 束} !!

§2. 哲学： 「絶対的な微分を求めて」
(A.) 「微分」から「比較同型」へ

S : スキーム

$E \rightarrow S$: 楕円曲線の族

\implies 分類射 $S \rightarrow \mathcal{M}_{1,0}$

\implies その 微分 (KS) $\Omega_{\mathcal{M}_{1,0}}|_S \rightarrow \Omega_S$

\Downarrow

この微分の数論的 / 絶対的な類似

$$\text{'}\Omega_{\mathcal{M}_{1,0}}|_S \rightarrow \Omega_{\mathbf{Z}/\mathbf{F}_1}\text{'}$$

は存在するか (例えば、 $S = \text{Spec}(\mathbf{Z})$
や $\text{Spec}(\mathcal{O}_F)$, $[F : \mathbf{Q}] < \infty$ のとき) ? ?

ところが、 $\Omega_{\mathcal{M}_{1,0}}|_S = \omega_E^{\otimes 2}$ で

$$\begin{aligned} \omega_E \hookrightarrow H_{\text{DR}}^1(E) &\xrightarrow{\nabla_{\text{GM}}} H_{\text{DR}}^1(E) \otimes \Omega_S \\ &\longrightarrow \tau_E \otimes \Omega_S \end{aligned}$$

$$\implies \Omega_{\mathcal{M}_{1,0}}|_S = \omega_E^{\otimes 2} \rightarrow \Omega_S \text{ (KS)}$$

($\nabla_{\text{GM}}: H_{\text{DR}}^1$ に入る Gauss-Manin 接続)

↓

H_{DR}^1 、Hodge フィル ($\omega_E \hookrightarrow H_{\text{DR}}^1$) は数論的な場合にもある

\implies 後、 ∇_{GM} の類似 が必要

\implies de Rham 同型 を思い出してみよう
(= \mathbf{C} 上の比較同型) :

S : Riemann 面 \implies

$$H_{\text{DR}}^1(E/S) \cong H_{\text{sing}}^1(E/S, \mathbf{Z}) \otimes_{\mathbf{Z}} \mathcal{O}_S$$

$\implies H_{\text{sing}}^1(E/S, \mathbf{Z})$ の断面 (セクション)
は ∇_{GM} に対して horizontal

$\implies \nabla_{\text{GM}}$ は、 $H_{\text{sing}}^1(E/S, \mathbf{Z})$ の断面が
horiz. となる 唯一の接続 である。

\Downarrow

比較同型 を知っていれば \implies

∇_{GM} も知っていることになる。

結論: 数論的な **KS** を構成するには、
数論的な比較同型を構成すればよい。

(B.) 関数論的な比較同型

では、(大域的) 数論的比較同型 (ACI)
は、どんな形をしているだろうか？

(例えば、 \mathbf{C} 上では: $\otimes \mathbf{C}$
 p 進体上では: $\otimes B_{\text{DR}}, B_{\text{crys}}$ 等))

\mathbf{C} 上の幾何的な場合には: ∇_{GM} の存在
の間接的な証拠の一は、‘安定性’:

$$0 \rightarrow \omega_E \rightarrow H_{\text{DR}}^1(E/S) \rightarrow \tau_E \rightarrow 0$$

この完全系列が 分裂 すれば — つまり、
 H_{DR}^1 が 不安定 ならば —
 ω_E (= ample l.b.) に ∇ が入る
(矛盾！)

⇒ ‘ ∇ ’ は数論的な言葉に訳せないが、
‘安定性’ は訳せる

— 即ち、Arak. 理論的な束 (の安定性)
= 普通のベクトル束 + Hermite 計量

⇒ ‘安定性’ (例えば、 \mathbf{Z} 上で)
= ‘格子における物質の 等分布性’

注 : Arakelov 的度数大 (小)

⇔ 物質の密度が高い (低い)

↓

(ACI の) 予想される「形」 I:

{ DR coh. 内の物質の分布 }

≅ { étale coh. 内の物質の分布 }

注：右辺は‘ガロア’により、‘等分布’
⇒ ACI より、左辺も‘等分布’

整数論では、‘物質の分布’は
普通、‘test fns.’で測られる ⇒

(ACI の) 予想される「形」 II:

$$\left\{ \text{DR coh. 上の test fns.} \right\} \\ \cong \left\{ \text{étale coh. 上の test fns.} \right\}$$

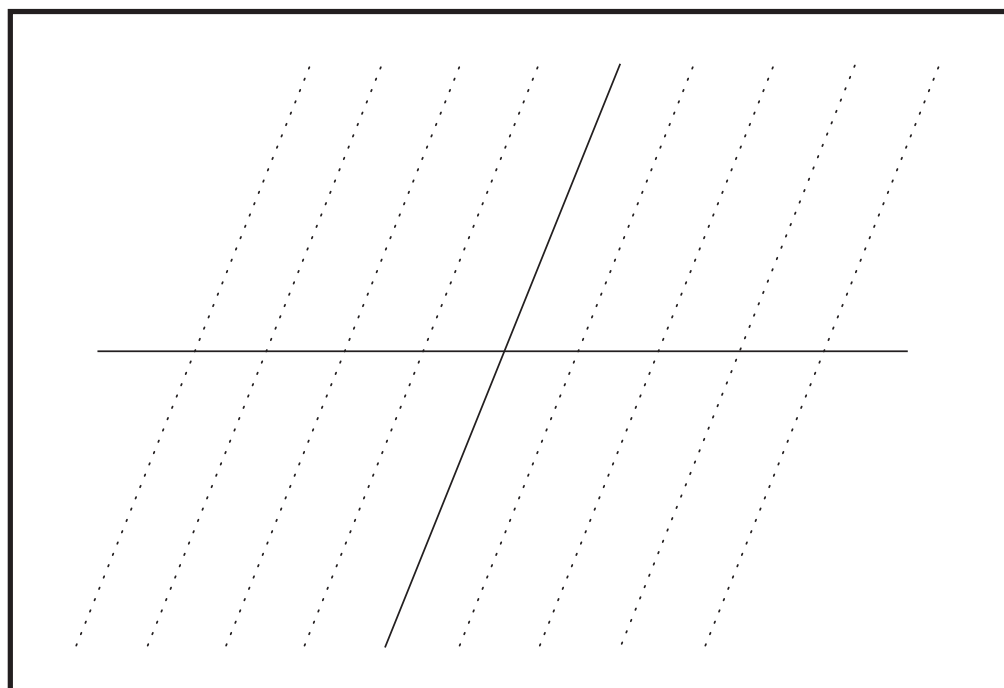
但し、‘ \cong ’は数体のすべての素点で
等長 (isometry) であってほしい。

(Arakelov 理論を参照)

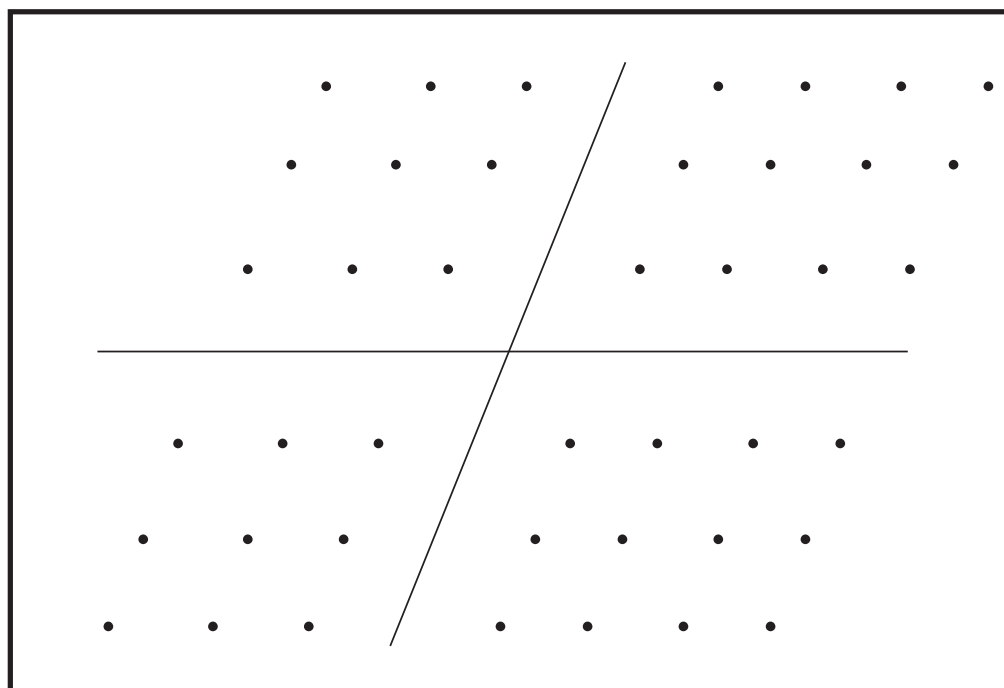
.. = 主定理の内容そのもの！！

‘Hodge-Arakelov 比較同型’

分裂するときの物質の分布：



等分布なときの物質の分布：



(C.) 離散化と非線型性の意味

注: 分布を測るためには、どうしても
非線型的な test fns. が必要

— cf. \mathbf{C} や p 進体上の Hodge 理論の
線型性、大域的モチーフ理論への
加法的なアプローチ

非線型性の原因:

- (1.) 一般に、Arak. 理論 では、ものは
非線型的になりがち (例: $H^0(\mathcal{L})$)
- (2.) 非可換トーラス \approx テータ群の
 \approx Heisenberg 代数 (cf. ガウス
分布) の 非線型的な対称性

離散性とも密接に関係している：

Hodge-Arakelov 比較同型 =

‘局所体上の Hodge 理論たちの離散化’

— 例えば、

Hodge 理論 / \mathbf{C} \approx ‘ $E_{\mathbf{R}}$ 上の微積分’

HACI \approx ‘等分点上の離散的な微積分’

\implies 周期は

$$2\pi i = \lim_{d \rightarrow \infty} d \cdot (e^{2\pi i/d} - 1)$$

$$= \lim_{d \rightarrow \infty} (\text{テータ関数} / \mathbf{G}_m) |_{\text{等分点}}$$

極限に現れる「系」の類似。

楕円曲線の
Hodge-Arakelov 理論 II

望月 新一

京都大学数理解析研究所

motizuki@kurims.kyoto-u.ac.jp

§1. 主定理の証明の方針

§2. Θ -Convolution

§1. 主定理の証明の方針

(A.) 主定理の復習と証明の準備

K : 標数 0 の体

E : K 上の楕円曲線

E^\dagger : その 普遍拡大 (2次元群スキーム)
 $= \{(\mathcal{L}, \nabla_{\mathcal{L}}) | \deg(\mathcal{L}) = 0\} = H_{\text{DR}}^1(\mathcal{O}_E^\times)$

$\eta \in E(K)$: 位数 m の等分点、

$d > 0$: 整数 s. t. d が m を割らない。

$\mathcal{L} \stackrel{\text{def}}{=} \mathcal{O}_E(d \cdot [\eta])$

主定理: 制限射

$$\Gamma(E^\dagger, \mathcal{L}|_{E^\dagger})^{<d} \xrightarrow{\sim} \mathcal{L}|_d E^\dagger$$

は同型に成る。

注: $E^\dagger \rightarrow E \dots \omega_E$ -torsor ($\omega_E = \Omega_E|_{0_E}$)

つまり、 $E \times \mathbf{V}(\omega_E) = \text{Spec}(\mathcal{O}_E[\tau_E])$
に「ひねり」が付いたもの

$\implies E^\dagger/E$ の torsorial degree

(相対的度数) が定義される: ‘ $< d$ ’

更に、 $F^j(-) \stackrel{\text{def}}{=} (-)^{<j}$ で主定理の左辺
に (Hodge) filtration が入り、

$$F^{j+1}/F^j(\Gamma(E^\dagger, \mathcal{L})^{<d}) = \Gamma(E, \mathcal{L}) \otimes \tau_E^{\otimes j}$$

\implies 楕円曲線のモジュライ空間上で考えると、
主定理の両辺は、rank d^2 の
ベクトル束となり、

$$\deg(\Gamma(E, \mathcal{L})) \approx 0$$

$$\deg(\text{左辺}) \approx \sum_{j=0}^{d-1} j \cdot \deg(\tau_E)$$

一方、

$$\begin{aligned} \text{右辺} &= \mathcal{L}|_{dE^\dagger} \cong \mathcal{O}|_{dE^\dagger} \\ &= d \text{ 等分点上の } \underline{\text{関数}} \end{aligned}$$

\implies 楕円曲線のモジュライ空間上では、

$$\deg(\text{右辺}) = 0$$

(B.) Θ 関数とその微分

無限遠点 (標数 0) の近傍に注目。

帰着 : $\deg(\mathcal{L}) \rightsquigarrow 1 \dots$ (Θ 群の理論、
元の E を \exists sub で割ることにより)

次に、Schottky 一意化

$$\mathbf{G}_m \rightarrow \mathbf{G}_m / q^{\mathbf{Z}} = E$$

上で定義される \mathcal{L} の「 Θ 自明化」により、

$$\Gamma(E, \mathcal{L}) \text{ の元 } \rightsquigarrow \Theta \text{ 関数 } \sum_{n \in \mathbf{Z}} q^{n^2} U^n$$

と同様に、

$$\Gamma(E^\dagger, \mathcal{L}) \text{ の元 } \rightsquigarrow \Theta \text{ 関数の } \underline{\text{微分}}$$

$$(U \frac{\partial}{\partial U} \text{ に関して}) \dots \text{ cf. Weierstrass } \zeta$$

ただし、

U : \mathbf{G}_m 上の普通の乗法的座標

q 当設定 : $= q^{1/2d}$ 元の楕円曲線

すると、 $\Theta = \sum_{n \in \mathbf{Z}} q^{n^2} U^n$

\implies 主定理の「制限射」は本質的には :

抽象的な多項式 $P(-) \mapsto$

$$\sum_{n \in \mathbf{Z}} q^{n^2} \cdot P\left(U \frac{\partial}{\partial U}\right) U^n$$

$$= \sum_{n \in \mathbf{Z}} q^{n^2} \cdot P(n) U^n$$

(但し、多項式の次数は $< d$ とする。)

ただ、定理では、 d 等分点 $\mu_d \subseteq \mathbf{G}_m$ に 制限 している \implies 制限射は次のように：

$$\text{多項式 } P(-) \mapsto \sum_{|n| \leq d} q^{n^2} \cdot P(n) U^n$$

(但し、 q の高い巾の掛かる項を無視。)

\implies 制限射の本質は： (符号、 q を無視)

$$\text{多項式 } P(-) \mapsto$$

$$\{P(0), P(1), \dots, P(d-1)\}$$

\implies (周知の通り) $P(T)$ の基底として、

$$\binom{T}{0}, \binom{T}{1}, \dots, \binom{T}{d-1}$$

を採れば、 \mathbf{Z} 上で完全な同型が得られる。
(少なくとも、無限遠点の近傍上で。)

(C.) 次数計算

あと、無限遠では、「ガウス極」が発生：

$$\approx q_{\text{当設定}}^{n^2} = q_{\text{元の楕円曲線}}^{j^2/8d}$$

(注：次数 j のところでは、符号を無視したため、 n は $j/2$ に対応。)

⇒ 楕円曲線のコンパクト化されたモジュライ上で、制限射の両辺の次数を計算すると、

$$\text{ガウス極の寄与} \approx \frac{1}{8d} \sum_{j=0}^{d-1} j^2$$

$$\begin{aligned}
&\approx \frac{1}{8d} \cdot \frac{d^3}{3} = \frac{1}{12} \cdot \left(\frac{d^2}{2}\right) \\
&= \left(\frac{d^2}{2}\right) \deg(\omega_E) \\
&\approx \sum_{j=0}^{d-1} j \cdot \deg(\omega_E) \\
&= -(\text{元の DR side の次数})
\end{aligned}$$

\implies (Zhang の理論の適用により)
 次数が ちょうど合う ため、制限射は、
 無限遠だけでなく、モジュライ全体の
 上で 完全に同型 になる。

(証明終。)

(D.) KS 射とガウス極

無限遠で整構造を調整した後の主定理の左辺を

$$\mathcal{V} \stackrel{\text{def}}{=} \Gamma(E^\dagger, \mathcal{L})^{<d} (\text{ガウス極})$$

と書く。すると、主定理の制限射

$$\mathcal{V} \xrightarrow{\sim} \mathcal{L}|_{dE^\dagger} \cong \mathcal{O}|_{dE^\dagger}$$

は、楕円曲線のモジュライ上（無限遠点の近くでも）完全に 同型 になる。

一方、 $\text{base} \otimes \mathbf{Q}$ の Gal 群は右辺に自然に作用するから、

$$\text{Gal} \curvearrowright \mathcal{V}$$

この作用が、Hodge filtration $F^j(\mathcal{V})$ をどのくらい保つかを見ると、

$$\text{Gal} \rightarrow \text{Flag}(\mathcal{V})$$

(但し、 $\text{Flag}(\mathcal{V})$ は、 \mathcal{V} に入るすべての同じ rank のフィルのモジュライ)

... 数論的な KS 射

$$F^{j+1}/F^j(\mathcal{V}) = \Gamma(E, \mathcal{L}) \otimes \tau_E^{\otimes j} (\text{ガウス極})$$

\implies ふつうの KS みたいにするためには、
(例えば、Dioph. 幾何に応用するには)
ガウス極をなくしたい!

§2. Θ -Convolution

(A.) Θ 関数との Convolution

ガウス極をなくしたい

\implies (I.), (B.) に出てきた

$$\sum_{n \in \mathbf{Z}} q^{n^2} \cdot P(n)U^n$$

を $\sum_{n \in \mathbf{Z}} P(n)U^n$ にすり替えたい

\implies 「Fourier 級数」

$$\sum_{n \in \mathbf{Z}} q^{n^2} \cdot P(n)U^n$$

の添字 n の係数を q^{n^2} で 割りたい

\implies 元の $\Theta = \sum_{n \in \mathbf{Z}} q^{n^2} \cdot U^n$ との
「逆 convolution」を取りたい

注：一般に、Fourier 変換を施すと、

掛け算 \leftrightarrow convolution

つまり、「 Θ -Convolution」 (= Θ との convolution) の 逆 を主定理の制限射に合成したい。

問題：これを、モジュライの無限遠点の近くで出来ても (= 上の q 展開の議論)、モジュライ全体の上に延長できるかどうか不明。

次節の定理によると、それが できる。

(B.) フーリエ係数の可逆性

$E, \eta, \mathcal{L} \stackrel{\text{def}}{=} \mathcal{O}_E(d \cdot [\eta]):$ 主定理と同じ。

更に、 $G, H \cong \mathbf{Z}/d\mathbf{Z}$ s.t.

$${}_dE = {}_dE^\dagger = G \times H$$

が与えてあるとする。

$G:$ 「制限部分群」

(テータ関数を制限してフーリエ変換するための部分群)

$H:$ 「Lagrangian 部分群」

(実際、 E/H 上で作業する

— cf. (I.), (B.) の「帰着」)

定理 (フーリエ係数の可逆性) :

生成元 $s \in \Gamma(E, \mathcal{L})^H$ (= H 不変部分)
が、 G 上に定める「代数的テータ関数」
(cf. Mumford の理論)

$$\Theta_s \in \mathcal{L}|_G \cong \mathcal{O}|_G$$

の (有限巡回群) G 上の関数としての
フーリエ係数 は (ある非常に珍しい例外
を除いて) 全部 可逆 である。

注 : 従って、これらのフーリエ係数は、
楕円曲線のモジュライ上で考えると、
新しい (?) modular unit になる \implies

問題 : Siegel modular unit に関する係数
を計算せよ。 (未解決)

もう一つの帰結： 滑らかな楕円曲線の場合、フーリエ係数の可逆性

⇒ Θ -Convolution の可逆性

⇒ 主定理の制限射と、 Θ -Conv. の逆との合成がとれる

⇒ その合成は、「新しい比較同型」を定める（詳細略）。

問題点： 無限遠では、部分群 G, H が「良い位置」にある時、この新しい比較同型では、ガウス極はなくなる。しかし「ほとんどの位置（=無限遠点）」では、ガウス極は部分的にしかなくなるならない。

⇒ 完全になくすのはまだ先の話。